

京都大学	博士 (地球環境学)	氏名	Laÿna Droz-dit-Busset
論文題目	The Milieu as Common Grounds for Global Environmental Ethics グローバルな環境倫理の共通根拠としての風土		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、和辻哲郎が提唱した風土の翻訳概念であるミリユールを環境倫理学に適用することを通じて、世界観の多元性の下でなお合意可能だと期待できる持続可能な生活様式を支える動機枠組みを提供することを企図している。これは全6章からなる。</p> <p>第1章は序論であり、環境問題が緊急事態の水準に達しているとの基本認識を示した後、世界観の多元性という現況を確認するとともに、環境問題の技術的解決を志向する科学主義を批判的に検討する。次に、普遍的環境倫理を追求する立場を批判し、その代案として道徳的最小主義を提案する。さらに、文化横断的対話に支えられた哲学的推論および環境運動家の参与観察という本研究の方法論を説明している。</p> <p>第2章は、環境／ミリユール／個人の3層という概念枠組みを提示した上で、観察者の自己に対置された現象学的自己という視角を設定する。ミリユールに関しては、和辻の風土を起点として、相互関係による構築、現象学的自己による経験、地球規模の相互結合、継続的変容などの特徴を抽出した上で、動植物や生態系を従来以上に明確に射程に入れた新たな見方を提案している。そして、中間母体および中間足跡という概念により、ミリユールと個人の思考・行為との関係を分析している。</p> <p>第3章は持続可能性に焦点をあわせて、人間の繁栄および自己決定の価値から出発して、地球環境の自律性の保持を提案する。次に、この提案の規範的含意として、環境への加害の最小化、予防的禁止、全体論的考慮による行動などを導出する。さらに、予想される批判に反論し、具体的政策間での優先づけ問題を検討している。</p> <p>第4章は個人の責任に関して、行為の足跡について考察した後、環境への加害やその累積的帰結、そして集合的足跡という観念を検討することにより、具体的文脈のなかで個人の責任の程度が異なりうることを指摘する。次に、個人の理解・無知、行為変更の難易度、基底的ニーズなどが責任の程度を左右すると論じている。さらに、回復的行為をなす責任について、その判定根拠の要素を分析し、集合的行為へと応用している。</p> <p>第5章では、環境倫理の共通基盤の探究を試みており、相互行為を出発点として個人間関係を通じた自己形成を構想する。また、政治空間における寛容の意義を説き、交渉を位置づけ、社会的安定についても考察している。最後に、新たな行動・生活様式に向けたネットワーク作りに関して、ミリユール内部では積極主義を、ミリユール間では協働を、越境的文脈では一種の干渉主義を提案している。</p> <p>第6章は結論であり、世界観の多元性下における持続可能な生活様式を支える動機枠組みを構築する際に、ミリユールが礎石となることを確認している。ミリユールは、人間の相互依存を承認し、継続的に変容し、現象学的自己によって経験され、動態的ネットワークにより地球規模で相互に結合しうる。将来の研究課題としては、本論文で提案した動機枠組みを学際的研究において活用することや、この動機枠組みを科学と政策のインターフェイスへと展開させること、さらには他の生物種を包含した共同体を構想することなどを挙げている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

地球規模の気候変動から新興国・途上国での深刻な大気汚染・水質汚濁や森林破壊にいたるまで、種々の環境問題が深刻化する今日、持続可能性に合致した生活様式・行動様式を支える動機的機序の哲学的解明や、持続可能性に反した行為に基づく責任の倫理的な分析が、喫緊の学的課題となっている。この課題に対して、欧米の環境倫理学では多様な考察と提案が蓄積されてきた。しかし、文化の多様性を十全に踏まえた上で、アジア思想を活かしつつ西洋思想の蓄積と照合し融合させることによって、いかなる新たな理論を構想しうるかは、なお未開拓の学問的・実践的課題であり、これに本格的に取り組む研究が待たれてきた。

本論文は、京都学派の和辻哲郎が唱えた風土の翻訳概念としてオギュスタン・ベルクにより示されたミリュウを中核にすえた上で、世界観の多元性の下でなおも合意可能な行為・生活の動機を、環境／ミリュウ／個人という多層的枠組みの下、文化横断的視角から哲学的に探究したものである。考察から得られた結果およびその意義は、次の3点に要約される。

第1に、「風土」のフランス語訳である「ミリュウ」を鍵となる概念とした上で、環境保護の観点からこの概念に改良を加えることによって、持続可能な生活様式・行動様式の動機を説明する理論構築を試みている。これは、かつての環境倫理学に見られた、西洋倫理学の限界の補完物を非西洋思想に追い求めるオリエンタリズムの変種から明確に一線を画するものであり、旧来の素朴な西洋／東洋の二分法に捕らわれず文化横断的地平を備えた1つの視角を提示しようとする試みだと言える。この試みには、環境倫理学の新たなアプローチの一例を示している点で、小さからぬ学術的意義を認められる。

第2に、本論文の特徴として、風土が再解釈されたミリュウを中核的概念とした理論の提示や、ミリュウの越境的さらには地球規模での結合という構想、持続可能性・責任等に関する西洋哲学での知見の活用、日本・台湾等の環境運動家へのインタビューから得た知見を織り込んだ考察などを挙げられる。これらの特徴は、特定の文化を前提とせず、むしろ文化横断的な理解可能性を志向した一理論の提出へとつながっている。文化の多様性および衝突や、日本を含む非西洋諸国における環境問題への意識の相対的な低さに鑑みると、一方では西洋的思考枠組に拘束されず、他方では非西洋的思考枠組に安易に解決策を求めない反偏狭主義的かつ複眼的な視点が地球環境学に求められている。このような視点を本論文が探査していることには、環境倫理学という分野の枠を超えた地球環境学上の意義が見出される。

第3に、持続可能性という集合的理念が各人に対していかなる規範的含意をもつかを探究し、また環境への加害を行った個人はどこまで道徳的責任を負うかを分析している。これらの作業は、持続可能性の理念の下で各人がいかなる行為を倫理的に求められ、その成否によりどこまで責任を負うかについて、新たな観点から光を当てるものである。ここに、本論文の社会的意義を認めることができる。

よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。